

『「型」が身につくカルテの書き方』

佐藤 健太(著)

[評者] 医療福祉生協連家庭医療学開発センター長/

千葉大大学院看護学研究科附属専門職連携教育研究センター特任講師 藤沼 康樹

これまで寡聞にして、カルテ記載に関してフォーマルな医学教育カリキュラムはあまり目にしたことがない。むろんいわゆる POS システムにおける SOAP(主観的情報、客観的情報、評価、診療計画)に分けて記載することはよく普及しているが、その意味はあまり知られていない。

本書の特徴は、医学教育における医師の成長段階としての RIME モデル(Reporter⇒Interpreter⇒Manager⇒Educator)と、SOAP(Subjective, Objective, Assessment, Plan)を対応させて、診療記録を教育や診療の質改善と結び付けているところにある。そして、これまでは単に“患者の訴えを書く領域”とされていた SOAP における「S」を「間接的に得られた情報」，“診察や検査結果を記載する領域”とされていた「O」を「直接観察による所見」と明快に定義し直している(これらの情報をどう集めるかは、診療の場によって違うことも強調されている)。アセスメントの「A」はしばしば問題リストや異常値の羅列になるが、これを「意見」と定義し、省察のもとに自身の考えを記載する場としている。このアセスメント「A」に意見を論理的に記載する

こと自体が、臨床推論能力の訓練そのものになるであろう。それに基づき診療計画「P」を記載するが、ここに含まれる内容として予防や退院調整、介護福祉サービスを重視しているところが、著者の総合診療医らしさを感じる。

著者は、診療所における地域ケアや在宅診療から、大規模総合病院まで、非常に幅広い場での診療経験があり、本書における診療の場(病棟、外来、訪問診療、救急、ICU)ごとのカルテ記載の記述は圧巻である。おそらく、これだけのバリエーションのある診療現場における診療情報に関して、深い洞察ができる医師はそうそういないし、分担執筆になりがちなこうしたテーマを、単著として完成させた著者に敬意を表したい。

今後の日本のヘルスケアシステムの大きな課題が「連携」であり、カルテがそのためのコミュニケーションの重要な結節点になるであろう。若い研修医だけでなく、自身の診療の質の向上をめざしているすべての臨床医に、一読を勧めたいと思う。

● B5/ 頁 140/2015 年 / 定価: 本体 2,800 円 + 税

[ISBN978-4-260-02106-7] 医学書院刊